

エジプトの小児病院での活動報告

A report of nursing activities at a children's hospital in Arab Republic of Egypt

○加藤なつみ

Natsumi Kato

JICA 海外協力隊

Japan Overseas Cooperation Volunteers

【はじめに】

筆者は2022年8月から2024年7月までエジプトでJICA 海外協力隊看護師隊員として活動した。

活動先であるA大学小児病院は日本の無償資金協力では1983年に設立され、1983年から2002年の間に208名の日本人専門家が派遣されてきた。来院患者は首都カイロからだけでなく、エジプト全土に及ぶ。古くからあり、多くの診療科を有する本病院は現地で『日本病院』と呼ばれている。筆者は看護部に赴任し、活動を開始した。

2年間エジプトの看護に関わる中で、筆者が取り組んだ活動について報告する。

【方法】

当初の要請に基づいて目標を立て、実施した。

主な要請内容は、①指導プログラムの見直しや策定、②手洗いなどの基本的な衛生指導や感染に関する知識の習得につながる活動、③看護サービス向上につながる支援、④基礎的な看護技術習得のための指導、だった。

赴任後3か月は病棟やユニット、感染管理チーム等に2週間毎のローテーションで見学した。見学で見えてきたことを毎日カウンターパートにレポートとして提出し共有を図った。3か月後、カウンターパートと問題について意見交換し、主に感染対策や皮膚の管理、患者の療養環境整備に取り組むこととなった。

4つの目標とそのための具体策を立案した(表1)。

表1 立案した活動目標と具体的な取り組み

目標	具体的な取り組み
①標準的感染予防策、院内感染対策行動をとることができる	・手指衛生の遵守強化 ・感染コントロールチェックリスト使用によるごみ分別、床へのごみ投棄の減少
②患者の皮膚トラブルに対する予防行動ができる	・チェックリストを用いて皮膚トラブルの観察ができる ・皮膚トラブル予防に関するワークショップ2回開催 ・病室毎に母親へのセミナー開催
③患者自身が心身ともに健康を保つ環境を作る	・患者・家族向けのセミナーを月1回実施 ・看護師向けワークショップを企画 ・入院中にできる遊びを月1回提案 ・国際看護の日に向けて動画作成を企画
④子どもが危険を予測し、日常の行動を見直すことができる	・エジプト日本学校で学校生活の安全についてのワークショップを実施

本報告では個人が特定されないように配慮した。

【結果】

①手指衛生の遵守については、看護師やインターン、学生へのアンケートから手指衛生の重要性の理解には繋がったことが分かった。ごみ分別は不十分なままだったが、感染管理チームへの現状報告をすることはできた。

②皮膚トラブル予防に関するワークショップ後は褥瘡のリスクが減少していた。病室を回っての患者の母親への皮膚トラブルのセミナーは看護師も同行したため、看護師による家族指導が行えた。

③患者・家族向けのセミナー後、患者は指導された手洗いを実践した。筆者が作成した教材を使い、ソーシャルワーカーは自発的に月1度のペースでセミナーを継続している。看護師向けに企画した「患者の療養環境について考える」ワークショップは実施できなかった。

小児患者には、看護師がどう見られているかを示すこと、及び患者のストレスの表出、プレパレーションを目的として『看護師ごっこ』の遊びを行った。この様子を看護対象のワークショップで見せることを計画していたが、できなかった。

パラグアイの看護師隊員と協力し、5か国の看護師と患者からのインタビューを集めて動画を作成したが、時間がかかり任期中の配信はできなかった。

④7つのエジプト日本学校で28回安全管理や応急処置などに関するワークショップを実施し、ワークショップ後、子どもたちが走らないように気を付ける様子が見られた。

【まとめ】

病院での活動及び動画作成は主に看護師の基礎知識や技術の向上とともに、看護への動機づけを意図して行ったものであり、小さな変化が認められた。意図した通りの反応がなかったことも多かった。

学校での活動により、不要なけがの予防をすることで、間接的ではあるが、病院への来院患者の減少と重症な患者がスムーズに治療を受けられることにつながればと考えている。

日本とエジプトでは医療・看護という点では大きな差は生じないのではないかとという先入観があった。活動を通して、エジプトの看護師や医療に関わることで同じく医療や看護を学んでも衛生概念やリスク管理などへの認識の違いに気づかされた。現地でいくら医学的根拠に基づく話をしても、改善や習慣化されない事については国民性、文化、宗教、看護教育の違いなどの他にも要因があるのだろう。相手を理解するだけでなく、理解した上で起きている問題に対しどのようにアプローチしていくかが重要である。エジプトでは日本の看護現場では感じなかったことが沢山あり、何が現地の看護師のため、患者のため、病院のためになるのか考えた2年間となった。

【利益相反】

本報告における利益相反はない。